

【研究ノート】

福祉施設職員の東日本大震災時の対応記録

岡 本 多喜子

はじめに

2011年3月11日に東日本の太平洋岸を襲った津波は、未曾有の被害を与えた。行方不明者の多くは、3年半が経っても発見されることなく時間が過ぎている。このような災害に直面したとき、平時であっても日常生活を送るために支援を必要としている方々や保育に欠ける乳幼児を利用対象者としている社会福祉施設では、職員はどのような行動をとったのであろうか。その行動を知ることは、今後の災害時の対応に生かすことができるのではないだろうか。

この研究ノートは、2011年3月11日の地震およびその後の津波被害に遭遇した岩手県上閉伊郡大槌町吉里吉里にある社会福祉法人堤福祉会が経営する堤乳幼児保育園と、ユニット型の特別養護老人ホームらふたあヒルズの職員たちを対象とした聞き取りをまとめたものである。同じ法人の旧来型の特別養護老人ホーム三陸園と総合福祉施設ゆーらっぶでの職員の動きは、研究ノート「東日本大震災に遭遇したある特別養護老人ホーム職員のモノグラフ」と題して、『明治学院大学社会学・社会福祉学研究』第143号（2014年）に掲載している。そのため本研究ノートの「はじめに」の部分は前号の記述と重複していることをおことわりしておく。

大槌町は明治学院大学とボランティア連携協定を締結している。明治学院大学の学生ボランティアは、ボランティアセンターを通じて、現在も定期的に大槌町での活動を継続しているが、被災後に最初に明治学院大学のボランティア

学生を引き受けてくれたのが堤乳幼児保育園である。

2012年夏に、明治学院大学のボランティアセンターを通じて、堤福祉会から個々の職員がどのような動きをしたかの記録を作成したいとの依頼あった。堤福祉会は高齢者施設を2カ所経営しているために、高齢者福祉を研究の中心にしている岡本に話がきた。

その後、2012年8月30日（木）から9月2日（日）の4日間にわたり、当時の社会福祉学科の学生5名と岡本とで、堤福祉会が用意してくれた職員からの聞き取り調査を行った。聞き取り調査は半構造的な手法で行ない、事前に各職員は質問項目を渡されている。また堤福祉会はこの調査にあたってテープでの録音記録を行なったが、私たちはすべてノートへの記録とした。そのため聞き取り調査では2～3名をひとつのグループとして対応した。

聞き取りは、職員ごとに保育園、特別養護老人ホーム三陸園と総合福祉施設ゆーらっぶ、特別養護老人ホームらふたあヒルズ別にまとめ、その内容については堤福祉会の総合施設長を中心に各施設の中心メンバーが目を通し、修正を行った。その後、この記録は研究の一環として公開することの承諾を堤福祉会からいただいた。

今回、この記録を公表するにあたり個別職員の名称はすべて仮名としている。また発言内容をわかりやすくするために補足した言葉は（ ）に入れた。（マ）となっているのは、発言内容のまま記載したことを意味する。

具体的な記述に入る前に、本研究ノートの対象となった施設について説明をする。社会福祉法人堤福祉会は1975（昭和50）年7月29日に社会福祉法人（厚生省社第738号）を設立している⁽¹⁾。そして1976（昭和51）年4月1日に「堤乳幼児保育園」を開設した。その後、1981（昭和56）年4月1日に特別養護老人ホーム三陸園を開設、三陸園の敷地内にショートステイを1992（平成4）年

1月に、デイサービスセンターを2000（平成12）年4月2日に開始し、在宅複合型施設「ゆーらっぷ」とした。「ゆーらっぷ」では、訪問介護事業所と在宅介護支援センターも運営している。さらに2005（平成17）年10月1日にユニット型の特別養護老人ホームらふたあヒルズと、同施設で空床利用型の短期入所生活介護事業を開始した。

保育園は理事長の自宅の隣にあり、そこは吉里吉里2丁目の高台になる。三陸園は吉里吉里地区の中心から少し離れた丘の中腹に位置している。らふたあヒルズは吉里吉里中学校の上にある。堤福祉会の施設はどれも高台にあったために、2011年3月11日の津波による被害は受けずにすんでいる。しかしそのために、多くの一般避難者が施設に避難してきた。特にらふたあヒルズの場所は丘を越えた反対側が、火災が発生していた赤浜地区のため、丘を越え200名を超える多くの避難者が来た。その避難者の一部は三陸園にも来ていた。また避難所である吉里吉里小学校の隣に保育園があるため、保育園は避難所へ向かう人の通り道ともなった。

本研究ノートの対象である堤乳幼児保育園は吉里吉里地区で2番目に設立された保育園で、震災当時も保育園はこの地区では2カ所のみであった。吉里吉里地区に最初に設立された吉里吉里保育園は被災し、幸いなことに人的な被害はなかったが園舎は津波に呑まれた。そのため、一時堤乳幼児保育園に吉里吉里保育園の利用者や職員が避難している。

「堤福祉会の状況 23.3.11当日 24.2.28現在」（堤福祉会総合施設長作成）と聞き取りによる当日の利用者および職員の被災状況についてまとめておく。2014年3月11日当時、堤乳幼児保育園には定員60名のところ75名の乳幼児が利用していた。そのうち、地震発生時に園にいた乳幼児は32名であった。園児とその家族で2組が津波の犠牲となった。職員は20名おり、職員自身の被害はなかったかが、職員の家族では2名が死亡、5名が行方不明となっている。

らふたあヒルズは定員が60名で、当日は59名の利用者がいた。利用者および

その家族で死亡したものは3名、行方不明は9名である。職員54名のうち、死亡した者は1名、行方不明が2名、職員の家族で死亡した者は4名、行方不明は7名という状況であった。

この記録を作成するにあたり、明治学院大学ボランティアセンター長・原田勝広先生、元副センター長・齋藤百合子先生、コーディネーター・市川亨子さんには大変お世話になった。ここに感謝を申し上げる。

このインタビューを担当した学生は、2012年当時・明治学院社会学部社会福祉学科4年、小林さつき、小松千尋、高林希彩、同3年、杉山奏、古屋誠の5名である。彼らは精力的に聞き取りを行い、記録をした。彼らの力がなければ、このモノグラフは成立していない。インタビューに携わった学生たちには特に感謝をしたい。

しかしそれらのモノグラフをこのようにまとめた責任は、すべて彼らの指導教員である岡本にある。このモノグラフに関する全責任も、当然岡本にあることを付け加えさせていただきたい。

1 堤乳幼児保育園

保育園は吉里吉里2丁目の高台にあり、避難所に指定されている吉里吉里小学校の隣にある。堤福社会の理事長宅は保育園の隣に位置している。この地区は、「昭和の大津波」で被害を受けた後に、安全な高台地区として家を建てた人々が多い場所である。しかし今回の津波では、保育園に続く坂道の下、水天宮や仮設の吉里吉里郵便局のある道路まで津波がきて、多くの住宅は流され、残った住宅も1階部分は津波が入る被害を受けた。

保育園では菅野園長、理事長の娘である保育士のヨシコさん、栄養士の野田さんの3名にインタビューを行った。

(1) 2011年3月11日午後2時46分

この日、園児は75名中32名が登園、職員は20名中14名が出勤していた。地震が発生した時は、0歳から2歳児は1階で昼寝をしていた。3歳以上児は2階にいた。職員はそれぞれの担当部署で決められた仕事をしていた。会議の準備や記念品作りをしていたヨシコ保育士は、地震と同時に3歳以上児のいる2階へ駆け上がった。地震の揺れはとても長く感じたが、それでも園児のなかには揺れに気づくことなく寝ている者もいた。

地震の発生と同時に職員は、昼寝をしている園児には布団を被せて揺れが治まるまで手で押さえた。3歳以上の園児は机の下に避難させ、そこに防災頭巾と上履きを投げ入れた。揺れが治まると、各職員は園児に防災頭巾とジャンパーを着せ、寝ていた園児には、寝間着の上からジャンパーを着せ、食堂に集めた。1階の事務所にいた野田栄養士は、すぐに調理場に駆け込みガスの元栓が閉められているのを確認した。その後、1階にある2歳児の部屋に駆けつけ、布団を被せて落下物から園児を守り、揺れの治まるのを待った。この時点では、津波の被害よりは地震の被害に関心が向いていた。

揺れが治まったことで、園児を引き取りに来る保護者もいた。保護者が来れば園児を引き渡すのは当然のことであった。しかしその後に津波が来て園児を引き取りにきた保護者のうち、2組の親子が犠牲になった。ヨシコ保育士はこの2組について以下のように話してくれた。

一組の園児は9カ月と3歳のきょうだいである。このきょうだいには、他に小学1年と2年のきょうだいもいた。母親が保育園に2人の子供を車で迎えに来て、小学生のきょうだいとともに曾祖母を助けるために家に戻って全員が津波に吞まれた。もう一組は若い母親で、園児を迎えに来てから母親は心細かったのだと思うが、夫のもとに戻って行った。しかし50歳の祖母を含め家族5人が行方不明となった。祖父は働きに行っていたため助かったが、家族の中でひ

とり残されてしまった。

この点からヨシコ保育士は、「従来の考え方では親元に帰すのが一番であったが、今回のことでその考え方が正しいのかが分からなくなった。親の判断に子供はついていく。大人の判断が常に正しいとは限らない。」と述べている。

(2) 津波の襲来

釜石に津波の最大波が到達したのは15時21分で、その高さは4.2m以上であった。吉里吉里地区に津波の最大波が到達したのもその頃であった。吉里吉里の最大波は16.1m、吉里吉里港東側の最大波は22.2mであった。津波警報が出ていることは、保育園の職員は知っていた。だが保育園は高台にあるため、職員たちは津波の心配をほとんどしていなかった。

しかし外に出ていたヨシコ保育士は、「保育園は高台にあるので津波が来るのが見えた。津波の高さが予想以上で、第1波がとてつよかったのが分かった。保育園の下の道は安全な避難道路と言われていて、津波もその避難道路までは来ないと周囲の人々は言っていた。しかし実際には大津波が襲ってくるのが見えた。そこでメガホンで保育園の下の方にいる人達に避難を呼びかけたが、逃げてくる人ばかりではなかった。ここまでは津波が来ないと言っていた人々が行方不明になってしまった。もっと大きな声で津波の状況を説明すれば良かったと、今は後悔している。」と今の気持ちを伝えてくれた。

菅野園長は外にいたヨシコ保育士の声を聞き、これはただ事ではないと感じた。そこで、園児を保育園よりもっと高い4丁目の方へ避難させることにした。高台へは、歩けない園児は職員がおんぶと抱っこで2人ずつを身体にくくりつけた状態で避難させた。

菅野園長は15時半過ぎに一度保育園に印鑑などを取りに戻った。しかし、余震や津波の怖さからすぐに園児が避難していたところに戻った。職員と園児が

保育園に戻ったのは16時20分頃であった。

野田栄養士は保育園に戻るとすぐに、他の職員と2人で夕食の準備に取り掛かった。備品として用意されていた発電機を使い、2升炊き炊飯器で炊いたご飯でちいさいおにぎりを70個程度作った。18時頃にはこのおにぎりを避難してきた一般の方にも提供した。1日目の段階では園児が26名、職員13名、ヨシコ保育士の弟の子供にあたる小学生2名、一般避難者13名が保育園に避難していた。

ヨシコ保育士は、「保育園は避難所として指定されている小学校へ避難する人々の通路となった。そこで救急対応の場所として保育園の玄関をあてた。駐車場には保育園の防災備品庫があり、そこには6時間程度使用可能な発電機(ガソリンが必要)、水、乾パンが入っていた。避難所となっていた小学校から、乳幼児を持つ親が保育園にミルクやおむつなどを貰いにきたが、ミルクは2回分ずつ、おむつは3枚ずつしか渡せなかった。哺乳瓶も貸し出した。保育園にも園児が避難しており、今後のことを考えるとミルクやおむつを十分に渡すことはできなかった。

ライフラインの機能は、すべて停止した状態であった。特に暗いことに対する恐怖心・不安を強く感じた。懐中電灯をつけても真っ暗な中にいるという恐怖はあった。」と語った。

(3) 震災後2日目～4日目

3月12日の午前9時に、避難所である吉里吉里小学校に設置された対策本部に報告された堤保育園の避難者数は114名である。そして吉里吉里小学校には250名以上が避難していた(総合施設長の手帳記載事項からの転載)。

ヨシコ保育士は、「備品庫があり、その中の発電機を使おうとしたがオイル(ママ)が無かった。困っていると漁師の方々が持っていたオイル(ママ)を分けてくれた。最初は発電機を使い(電気炊飯器で)ご飯を炊いたが、効率が悪いので2

回目以降はプロパンガスで炊くようになった。ご飯の水については、ペットボトルの水を最初は利用した。地元の方が見つけてきた湧水を使おうとしたが、黒く濁っていた。このような中で、保育園に避難している方には、温かいご飯とみそ汁を提供することができた。」と述べた。

野田栄養士は、「2日目からは、発電機の燃料を無駄にできなかったため、地域の方に教えてもらいながら土鍋でご飯を炊くようになった。おなかに何か入れる程度だが、子供達には1日3食提供した。やきいも、せんべいなども提供した。初日から2人の調理担当で料理を作った。避難中は2～5人の体制をとって、保育園の調理室で1日中調理をしていた。避難所の小学校で食事の配給の作業も手伝った。4日目ぐらいから物資が届き始めた。食料で助かった物資はお米やおにぎり、パンなどすぐ食べられて腹もちのよいものである。被災した大型トラックが運んでいた魚が届いたこともあった。しかし、魚などは賞費期限が短いためこれを優先的に調理するのが大変だった。家が流されていない住民などの地域の人々が、少しでも物を持ってきてくれたことがうれしかった。」と当時の状況を述べている。

さらに保育園では、津波によって流された吉里吉里保育園の園児25名とその親27名、職員13名を受け入れた。

ヨシコ保育士は、震災2日目の様子を「寒い日であったので、車からガソリンを抜いて暖をとったりしていた。避難所である小学校には生活するうえで必要なものが無く、保育園の2階にあった40人分の布団を小学校へ運んだ。トイレは保育園の隣の理事長の家のお風呂の水を使った。駅のトイレや裏の山に入って穴を掘って用を足したりもした。2日目には道路の確保ができ、3日目からは食糧を運ぶことができた。自衛隊員でない地元の人達が活躍し、1日目と2日目を過ごした。」と述べている。

吉里吉里地区では男性住民によって道路のガレキの撤去作業が行われ、2日目には幹線道路は車が通行できるようになっており、吉里吉里中学校近くの農業グラウンドにヘリポートを設置し、3日目からはヘリコプターによるけが人などの搬送を行っている（堤福祉会総合施設長の記録）。さらに、大槌町から盛岡市まで、震災の2日目に道がついていたという点も大きな意味を持つ。吉里吉里からも盛岡市までの道は確保できていた。問題はガソリンや軽油の不足であった。

3月13日（震災後3日目）になって、ヨシコ保育士は家族の安否を心配している職員を家に帰した。この日までに家族の安否の確認ができた職員4名が保育園に残った。この措置は堤福祉会全体で取られた対応であった。震災当日に勤務していた職員の多くは、家族の安否や家の状態を心配しながら勤務していた。

野田栄養士は、「大槌町に職員6人ぐらいでそれぞれの家族の安否確認に出掛けることができた。私は2日目に家族の1人が保育園に安否の確認に来てくれたため、情報として家族全員の無事は知っていた。しかしこの日、町に向かう途中で家族と会うことができ、顔を見て安心した。」という。

菅野園長もこの日、家族を探しに出かけたひとりである。「3日目の朝に釜石市にいる家族（夫）を探しにいった。家は流され、夫は見つからなかった。その日から釜石市内の避難所で生活をした。避難所では新聞紙2枚の上で寝た。地域の友人などにも夫の搜索をお願いした。4～5日目に釜石市からヒッチハイクをして一回保育園に戻った。その時に久しぶりにお湯で髪の毛を洗ったりした。保育園の先生が『食べて、食べて』と言ってご飯を食べさせてくれた。釜石市の避難所で過ごしていたので、保育園はとても恵まれていると感じた。保育園で水などを持たせてもらい、もう一度ヒッチハイクで釜石市に戻り、夫の搜索を続けた。」と話してくれた。

保育園の職員20名のうち、15名は家が津波に流された。2名は家を流されはしなかったが住める状態ではなかった。6名の職員の家族は行方不明となった。保育園には常に5～6名の職員が泊まって勤務をしていた。

4日目に家のある園児は親元に帰した。一般避難所に親が避難している園児は6日目に親元に帰し、すべての園児を親元に戻すことができた。それまでは保育園で寝泊まりしていた。

ヨシコ保育士は、「情報が混乱していたので、正確な情報が欲しかった。噂が噂を呼び、何が正しい情報なのかが分からなかった。自衛隊は、物は持ってきてくれたが今日・明日の地域の情報は分からなかった。(ヨシコ保育士の家族では)家を流された弟が1人いたが家族は全員無事で、堤福祉会の3つの施設も大きな被害もなく残ったことにより、他の人に比べると地域の情報を知ることができたことで、安心して仕事をすることができた。また、きょうだい達が消防団員であったことで(災害対策本部にもいたので)、大植町全体の情報も入ってきた。これらの情報を保育園で収集し、避難している人々に提供した。またけが人は特別養護老人ホームらふたあヒルズへ運ぶことが出来た。」と述べている。らふたあヒルズでは、被災し、避難してきた医師がけが人の治療にあたっていた。

(4) 被災から1週間目頃

野田栄養士によると「1週間程度で生活は安定してきたが、集団生活の中(で受けた)ストレスが出てきて精神的にまいった。ひとりの時間がほしいという気持ちがあった。」と言う。

これは多くの被災者に共通の気持ちではなかったと思う。保育園での生活は、温かい食事が可能であった分、他の避難所よりは恵まれていたが、慣れない集団生活と環境の変化でストレスがたまっていった。

被災した男性達のがれき処理などの活動をするなかで、保育士の中には「(自

分たちも)何かしないと」という不安が芽生えた。ヨシコ保育士によると、「1週間くらいの期間であるが、2丁目の物資の配給を保育園で行った。物資を取りに来た人に連絡先などを書いてもらうなどをしていて、地域消防団の人々は大型バスで寝泊まりしていた。小学校の避難所では男性の居場所がなかったため、校庭で火を焚いてそれを囲んで話をしていた。弱音を吐けない辛さがあったのではないか。8日目に地域消防団の人からカレーが食べたいと言われた。保育園で30数名分のおにぎりとお肉なしカレーを出した。おにぎりは1人1個であった。」とのことである。

(5) 保育園の再開

3月22日から大型の発電機を借りることが出来た。被災後2週間目にあたる3月25日(金)には保育園を再開した。ヨシコ保育士は、「自分の保育園として、地域の中にある保育園として何が出来るのかを考えた。人と会話をする場の提供、保育園という場所があること、保育園という組織があることの大きさを考えた。子供が安心する場、見守りができる場が必要であった。保育園を再開したことで子供たちも再会出来て喜んでいて。」と述べた。

3月25日に登園した園児は14名であった。14名の被災状況を見ると、自宅が全壊した園児が6名、自宅が浸水した園児は4名、自宅被害はなかった園児が4名である。親たちは自宅や親類宅の片づけや家族捜索、仕事のために子供を保育園に預けた。親の職業では、介護施設で働いている親の園児が2名、看護職で地域の避難所での仕事がある者の園児が1名、親が保育園勤務の園児が1名であった。3月26日(土)も9名の園児が登園している。

4月に入ると、被害のなかった釜石方面の部品工場などが再開し始め、そこで働いていた人々が子どもを保育園に預けるようになった。6月30日までの間に、他園の30名の子どもを受け入れたが、大槌や釜石の子どもも親の仕事の都

合で受け入れた。

3月25日から27日までの期間に男性保育士が3名、社会福祉協議会からの派遣で支援に来てくれた。この3名は食料も持ってきてくれた。保育士の支援は5月末まで続いたが、とても助かったとのことである。しかし人に頼むためにも受け入れ先側の準備が必要だった。支援に来てくれた保育士にどこまで仕事をお願いできるかなどの調整には苦労したという。

野田栄養士は、「3月25日に保育園は再開したが、車（勤務用の）を家族に貸していたことと、家を失った他の職員が残っていたこともあり、4月いっぱいまで保育園に泊まった。4月上旬は10人程度、下旬は3人の職員が残った。食事は朝、夕ともにカップ麺などを食べて過ごした。5月中旬から、通常の給食に戻すため、材料で足りないものを町のスーパーまで買い出しに行った。調理のほかに、大量に届いた物資の仕分け作業などを行った。」と言う。

4月22日に明治学院大学の学生がボランティアとして来た。ヨシコ保育士は、「3月25日の保育園の再開と3月30日の卒園式取材したフジテレビの寺川さんから電話があり、明治学院大学の学生を紹介された。学生達には保育園で物資の仕分けをしてもらうことにした。その後、誕生会の企画を依頼したところ、学生達が上手くやってくれた。いつも自分たちの力でどうにかしようとしていたが、甘えてもいいのかなと思った。」と言う。

(6) 震災当時を振り返って

最初に押し寄せる津波を見たヨシコ保育士は、「もっと強く、避難の呼びかけをすればよかった。メガホンのサイレンを使うなどの工夫をして避難を訴えれば、もっと多くの人々が被害にあわずに済んだかもしれないと思う。また、防災器具を女の人でも使えるようにしておけばよかった。」と述べている。

菅野園長は、「子供を地震直後迎えに来た保護者に止まるよう言ったけど、強く引き止められなかったことは忘れられないことになってしまった。」と述べている。

野田栄養士は、「当時の行動は、その時としては最善を尽くしたと思っている。これまでも避難訓練はあったが、参加する機会がなかった。せめて避難場所等を確認しておくべきであったと、今は思う。保育園の中に缶詰や乾パンなどの十分な備蓄があれば、避難していても気持ち的に安心できたと思う。現在は野外の倉庫にあった備蓄を保育園の2階に移す準備をしている。」「避難していて最もつらかったのは、1週間目と3月末だった。1週間目は、避難当日から無我夢中で指示に従うことしかできなかった状況から少し落ち着いて、これからどうなるのだろうかという不安が強くなった。このような状態で今後、仕事も続けられるのか心配だった。」と述べている。

保育園は3カ月後に表面的には以前の保育園に戻り、業者による給食も再開した。保育を再開し、子供たちがいることで、職員の間にあった被災してモヤモヤした気持ちが解消されたという面もあったと言う。

(7) 何が一番つらかったか

野田栄養士は、「同じ被災者であっても、家族の被災状況や家の有無で、職場内でも格差が生まれてしまった。自分は被害が少なかったため、周囲に何と声を掛けていか分からず戸惑った。周囲から言われる『いいじゃん、家があるから』『家族が生きていたから、いいじゃん』というふとした言葉にショックを受けた。そのような言葉に対しても何も言えず、ストレスを発散できず、ひたすら我慢していた。その時の支えになったのは、最後まで保育園に避難して残っていた保育士さんだった。子どもたちの元気な姿やある先生の笑顔に助けられて、仕事を続けられた。」と述べている。

被害状況の違いによる辛さは、誰もが口にしている。ヨシコ保育士も、「最

初の1カ月はよかった。皆必死だった。その後に差が出てきてストレスがたまる。皆が自分が一番大変だと思っている。自分のことを優先するようになる。」と語っている。

菅野園長は自らの大変さを振り返って、「立ち上がるのに時間はかかったが、保育園園長という仕事を年度末までしっかり務めて、締めたいという使命感がある。退職後は社会とのつながりをもう一度取り戻したいと思っている。亡くなったお父さん（夫）のためにも『泣いて終われない』という思いがある。」と述べた。

(8) その他

ヨシコ保育士によると、「保育園の職員は『子供を守る』という強い意識があったために、今回の災害時も動けたといえる。しかし保育園は女性の多い職場であるため、女性特有の課題も見えてきた。被災後に生理になり、その用意をしていなかったために苦勞した職員もいた。近くの家の人に生理用のナプキンももらっていたという。生理痛のひどい人だと、避難生活と生理痛でかなり精神的に辛くなってしまうこともある。周囲の人々がこの点を理解することも必要であると感じた。」と言う。

また5月18日にヨシコ保育士は避難所を訪問したが、「この時点で避難所に避難している人以外は避難所に立ち入れない雰囲気があった。それは子ども達にも影響していた。家のある人は遠慮し、仮設に当たった人はいろいろな物が仮設に届けられたことで、もらうことが普通になっていた。避難所は大きければよいというわけではない。トラブルが起きやすく、6カ所の避難所を移動していた親子もいた。車や一部が残った家に避難していた人もいた。障害者がいる家庭では、家族が障害者を隠していたために、障害者がいることを知らないケースもあった。

5月28日に保育参観を行った。この頃は人との関わりが少なくなっていたの

で、『がんばっぺし広場』と称して人々の再会の場とした。地域の100世帯に案内状と服・靴・食器・タオルなどと交換できるチケットを20枚ずつ配布した。小中学生にも10枚ずつチケットを配布した。保育園には私的な物資が入りやすかったので、このようなチケットも作れた。この場所に来て、人と再会することで自分の存在を他人に知ってもらうことができ、生きていることを確認した。そして会話が生まれた。

家が残っても心がさみしいこともあり、ひとりひとりの心の復興が大切だと思う。また避難するときには自分の物は3日から1週間分位を持っていくべきだと思った。避難しなかった人の中には、自分は津波から逃げ切れると考えていた人がいたのではないかと。誰もが、まさか津波がここまですごいとは思わなかった。病院等も避難所としての機能を持っていた方がいいのではないかと考える。自衛隊のお風呂に入れたのがとても気持ち良かった。」と述べている。

2 らふたあヒルズ

らふたあヒルズはユニット型の特別養護老人ホームである。吉里吉里中学校の少し上にあり、津波の被害はなかったが、建物に段差、フェンスの崩落、水道管破裂による1階居室天井より水が溢れ出すなどの地震での被害があった。

(1) 2011年3月11日

地震が発生した時、理事長はらふたあヒルズにいた。その時の動きを以下のように述べている。「午後2時30分頃はらふたあヒルズにいてニュースを見ながら昼食をとっていた。地震が発生し、らふたあヒルズの居室内の水道管が破裂し応急処置をしようとした。その後、施設は大丈夫だと思い、車で外に出た。何が起きたか分からず、海を眺めていた。その時には、津波は来ないと思っていた。

午後3時過ぎに大津波警報のサイレンが鳴った。水門を閉めたらふたあヒルズの施設長が施設に来た。施設長が来たから大丈夫だと思い、車で親戚の家に安否確認をするために向かった。途中の道で周りの人達に注意を呼びかけたが、みんな大丈夫だと言っていた。

黒い津波が来るのが見え、急いで保育園へ向かった。保育園の子ども達を保育園の上（4丁目の高台になっている場所）に避難させた。その後らふたあヒルズへ行き状況の確認と指示をして、次に三陸園に行き同じ様に状況の確認と指示を行った。それぞれの施設はしっかりとやるべきことを行っていたので、心配は要らないと思った。自分の役割は、フリーで動き支援が必要ならばそこへ行くことだと思っていた。軽トラで人の送り迎えをしたり、自宅にあった新品の服を配ったりして、なんとか一日が終わり、保育園で寝た。」

施設長は、地震が発生した時には三陸園にいた。消防団員である施設長は急いで車に乗り、防波堤の門を閉めるために海岸に行った。その後、らふたあヒルズに来たが、消防団員として避難所である吉里吉里小学校へ向かった。施設長は吉里吉里駅で避難してきていた知り合いの医師と偶然に会い、らふたあヒルズへ行くことを依頼した。施設のことは相談員の手島に任せた。消防団員としての活動が一段落する夜にらふたあヒルズに戻って職員と打ち合わせをする日々が続くことになる。当日の23時30分頃にらふたあヒルズに戻った施設長は、駅で会った医師と看護師4名とで会議を行い、必要な医療機器のリスト化、避難して来た人・けが人や病人の状況について確認をした。翌日の朝6時30分には再び活動を開始し、朝9時からの災害対策本部の打ち合わせに参加した。

相談員の手島は、その日体調不調で入院になった入居者がいたために県立大植病院へ連れて行き対応してもらった後、施設に戻って間もなく地震が発生したという。その時の様子を手島相談員は、以下のように語った。「警報が鳴り

響き、事務所の書類・置物などがかなり落下した。まだ地震で揺れている間に館内放送が使えたため、クリーンスタッフを事務所に集め、事務職員と共に各ユニットに派遣した。全スタッフで6ユニットを3ユニットに集約した。その後、階段を使い職員4人態勢でシーツなどを使い1階入居者を2階に移動した。

地震で1階の水道管が破裂し、居室の天井から水が降ってきた。水の元栓を閉めに外に出た。その時、津波警報は聞いていない。外で津波だという声が聞こえ、外を見ると壁のような波が押し寄せるのが見えた。すぐ下にある中学校ぎりぎりまで津波が押し寄せていた。校庭中央でしゃがみ込んでいる中学生達に、大声でらふたあに上るよう叫んだ。近隣の住民にも声を掛け、施設まで避難させた。

17時30分くらいに津波が引いてからは、けがをした人、意識のない人など多く運ばれてきた。玄関ホールは野戦病院状態になった。消防団員が医師を連れて来てくれた。看護師3名の指示を受けながら、介護スタッフ数名、事務、クリーンスタッフが救助にあたった。

津波で濡れた患者（けが人）がひどく寒さを訴えたため、タオルや利用者の衣類を集めて着替えさせた。裂傷、骨折、打撲、脳挫傷などの患者（けが人）がいたが、施設にあるもので緊急に対応せざるを得なかった。意識のない患者（けが人）にもAEDや吸引器などで懸命の処置をしたが、亡くなった方は4人にのぼった。停電したために明りはなく、数本の（懐中）電灯と医務用のペンライト（の明かり）で処置した。夜の10時ぐらいに治療は一段落ついた。

当時入居者は59名おり、状況を理解してくれる方が多く、当日は大きな混乱はなかった。個室のベッドのマットを安全なところに敷き、1つのマットに2人ずつ横になるところもあった。次の津波が来るのではないかと、また施設の周囲が火事のため、森が赤く浮彫にされ施設に火が移るのではないかと不安であった。一体、何が起こったのか、外部の状況が分からず不安であった。」

栄養士の星野は、事務所に手島生活相談員と2人でいた。星野栄養士はその時の様子を、以下のように語った。「地震が発生してすぐにロビーにあったペレットストーブを止めた。ドアを開けた。その後に安全確認のために各ユニットを回った。1階の入居者の移動を手伝いながら、利用者を1カ所に集めるために地域交流スペースに利用者を集めた。他の職員のなかには自分の恐怖心から泣いていたものもいたが、利用者は不思議と落ち着いていた。この時は津波のことは考えていなくて、地震（余震）による怖さしかなかった。

1階の水道管が破裂し、水汲み等応急処置に向かった。その後、他の職員から津波が来たことを知らされた。一般避難者がらふたあヒルズにも来るため、1階の地域交流スペースから、おんぶしたり、シーツやタオルケットで（担架代わりにして）利用者を2階へ運んだ。その際、利用者の介護度や健康状態も分からぬまま無我夢中で運んだ。

最初に一般避難者として負傷した中学生（津波の水につかっていた様子）とその（学校の）先生が来た。お湯で温めるなどの対応をした。

この時初めて厨房に向かい調理師達に会う。栄養士として厨房に行くのが遅れ、調理師達にも指示が出せない時間があったことを反省している。当時は、まずは利用者の安全を確保するべきだと思ってしまった。厨房はオール電化で火の心配はなかった。

冷蔵庫には、冷凍室がパンパンになるほど、普段から蓄えていた肉や野菜などの食材が多くあった。災害用の備蓄があったが、いつ支援が来るか分からない状況だったので、手を付けないでおくことになった。

夜になると施設長が魚肉ソーセージやチョコレート、ペットボトル（の飲み物）など少量の食べ物を持ってきてくれた。夜は食材を少しずつ分けて食べて過ごした。当日の夜、夫のお父さんが、らふたあヒルズへ会いに来てくれて家族の情報が手に入った。」

看護師の加藤は、地震が発生した時は1階のユニット「ひだまり」にいた。加藤看護師は、「経管栄養の準備を終えて休憩したところだった。地震発生当時、利用者はダイニングに1人、その他の9人は自室にいた。揺れの間、個室を回って『立たないでね』と声を掛けて回った。隣のユニットを見に行ったりと、水道管が破裂して天井から水が噴き出していたので、あわててしまった。床の水をバスタオルなどで拭き取った。

余震もあったので、ユニットの中心に集まっていた利用者を地域交流スペースに移動した。混乱もあったが2階に利用者を集めて落ち着いた。

次に施設にあるだけの医療用品を1階に集めた。その後一般の避難者が避難してきて、救急の患者（けが人）がどんどん玄関ホールに搬送されてきた。救急医療の現場では働いたことがなかったため、チーフ看護師に確認しながらないと落ち着いて作業ができなかった。

施設では十分な処置はできなかったが、傷口を生理食塩水で洗い流してガーゼや包帯、テープで固定し、骨折の場合は段ボールを添え木代わりにした。2階の利用者の様子は一度も見ることにはなかった。利用者の体調が安定していたことはありがたかった。」と語った。

介護職の小宮は、地震発生時はオムツ交換をしている最中だった。小宮は、「ゆれている間は目の前の利用者を守るために対応していた。周りでは泣き叫ぶ利用者もいて『大丈夫だから』と声をかけながら対応していた。入浴している利用者も多く、急いで出してもらった。

ユニットには職員が4人おり、利用者を部屋から出し、各フロア1カ所に集めた。その間も余震でゆれが続いていたため、布団を被せて頭を守った。それと同時に、浴槽など様々な物に水を貯めて断水時の準備をした。

その後は一般避難者が来るため1階にいた利用者にも2階に移動してもらった。その際エレベーターは動かなかったため、タオルケットやシーツなどに利用者をのせ、職員4～6人で階段を登った。

利用者は、今回の大地震を理解している人もしていない人も冷静で、比較的落ち着いていた。不安がる利用者へは『大丈夫』と声をかけ続けた。外を見ると中学校の下まで水が来ていて町全体が海のようなようだった。

当時の情報は利用者のラジオのみで、電気は懐中電灯をつけたり消したりしていた。当日の夕飯は無かったが、入居者が持っていたお菓子を分け合ったりして過ごした。嚙下障害のある利用者は、普段はゼリー食を食べていたが、その時には栄養補助食品を渡した。一日中余震が続いて利用者もその度に起きてしまった。」と語った。

らふたあヒルズには吉里吉里駅に避難しているところを施設長に声をかけられた医師が、その日の夕刻からいた。最初に医師を見た看護師は、すでに多くのけが人が搬送され野戦病院のようならふたあヒルズの玄関に、医師が茫然として立っていたと話している。それほどらふたあヒルズの当日は悲惨な状況であった。

また、らふたあヒルズは全館電化されている施設であったため、今回のような災害で停電となると、発電機しか頼るものはなかった。

相談員の手島は「誰がどのように指示したのか今では分からないのですが、1階にいた利用者を2階に避難させ、その後に1階に戻し、そしてまた2階に避難させることになったのです。エレベーターが（使え）ないなか、シーツに利用者をのせて階段を往復したのです。職員も混乱していたのだと思うが、利用者も大変だっただろうと思います。」と述べ、当時の混乱状況のひとつのエピソードとして伝えてくれた。

(2) 2日目から1週間程度

施設長は、「らふたあヒルズに避難して来た方のうち4名が死亡した。それらの遺体は吉里吉里中学校の体育館に設置した遺体安置所に移した。重傷の人

のために自衛隊にヘリコプターでの搬送を依頼するがヘリコプターは来なかった。そこで、吉里吉里中学校の校庭にヘリコプターの発着所を整備し、3月13日には富山・北海道・海上保安庁のヘリコプターにより19名を移送した。3月14日には自衛隊のヘリコプターで3名搬送し、さらに救急車で3名搬送した。

15日には遠野市災害対策本部へFAXで利用者・職員の状況や介護ボランティアの要請などを知らせるようにとの連絡が来た。16日には被災後初めて盛岡へ行き、県社協の会議に参加し、被害状況の説明と支援物資の依頼、介護ボランティア対策を要請した。その足で県庁長寿社会課へ行き被害状況を説明した。隣の山田町で被災し避難所にいた老人保健施設の利用者2名を受け入れた。」と述べた。

生活相談員の手島によると、2日目には一般避難者は他の避難所へ移動し、治療を必要とする患者（けが人）のみになった。手島は、「当日は家のことを心配する頭もなかったが、大槌町の状況を聞いて、我に返り、家族の安否を心配するようになった。

3日目には他職員と共にワゴン車で町へ出て、2時間だけ家を見に行くことができた。それぞれ分散して家族を捜した。避難所をまわり、休みだった職員とその家族の安否確認をし、出勤できる職員を捜した。

3日目から職員の出勤はあったが人員が足りない状況だった。2階に入居者を集約し、職員数を絞り、少ない職員でまわした（対応した）。利用者のストレスや不満がたまり始め、暴言・無口・奇声・幻聴・幻覚が出るようになる方もいた。限られたなかでの水分補給、点滴を行い、できる限り顔なじみの職員が寄り添って休むなど、入居者ができるだけ安心できる環境作りに努めた。

16日に施設長と、盛岡に必要なものを買出しに行った。食糧はあるが、衛生用品の備蓄はなかったため、職員のための下着などを含めワゴン車いっぱいを買ってきた。吉里吉里は携帯電話の電波が入らなかったため、携帯電話の受

信だけでもしようと職員達の携帯電話を持って出た。峠を越えると預かった携帯から受信音が鳴り響き（始め）涙が止まらなかった。盛岡の県社協の職員さん方が数多くの携帯の充電をしてくれた。

家族のことを口に出してはいけない立場だった。みんなが自分を出さなかった。目の前の人を救わねばならないという使命感があった。」と述べている。

栄養士の星野は以下のように語ってくれた。「2日目の朝も施設長が持ってきてくれた食料を利用者や職員と分けて食べた。ユニットが6つあり、それぞれに冷蔵庫があったため、とりあえず厨房一カ所に食材を集めようと思い回収した。施設内にある全ての食料を把握したうえで、仕分けをした。それらの食材を見て、1日2食として献立をたてていった。とにかく一日一日をどうにか乗り越えなくてはという思いだった。13日には一応16日までの献立を考えた。

電気は使えなかったがカセットコンロは6台あり、それを使って調理した。カセットコンロでは時間がかかるので、調理士と朝5時に起きミーティングをして調理の手順を検討した。ミキサー食など、利用者に合わせた食事を準備することは出来なかったので、おじやにして誰でも食べられるようにした。

あとは、とにかく野菜を摂れるようにしなくてはと思った。冷蔵庫の中のものは冬だったので、ある程度保存できると思った。溶けているものや、早く使わなくてはいけないものを優先して使い、献立を考えた。こんな時に食中毒や感染症を起こしては絶対いけないと思い、火を通すことやアルコール、水で薄めたハイター（台所用漂白剤）での消毒を調理員の間で徹底した。

2日目の夜に夫がらふたあヒルズへ来て再会することができ、家族の安否を知ることができた。夫の母の行方が分からなかった。4日目の14日には支援物資として菓子パンと牛乳が届いた。その翌日には自衛隊からお米も届いた。物資が来たときはほっとした。

自分には持病があり、普段から薬を服用していたが、震災から2、3日は薬がなく、不安なまま過ごした。その薬は簡単には手に入らないものだった。そ

のことを施設長に相談すると、施設長の公用車を貸してくれて、盛岡の病院へ向かうことができた。らふたあヒルズに避難していた妊婦夫婦も一緒に盛岡へ行った。盛岡に行くと携帯の電波が入り、その時主人の母が亡くなったことを知った。持病のことや家族のこと等不安は沢山あったが、みんな同じ状況で働いているなかで帰りたいとは言えなかったし、そういうことは考えずに働いていた。3月30日まではらふたあヒルズに泊まっていた。その間は17日に1回だけ帰宅したのみであった。

物資や給水タンクが来るたびに、仕分けなどやるべき作業がたくさんあり、2～3カ月はずっと忙しかった。」

看護師の加藤は、「自衛隊のヘリが来て、重症患者（けが人）を病院に搬送することができた。すべての重症患者（けが人）が搬送され、気持ちが少し楽になった。しかし今度は利用者の体調が崩れ始めた。脱水症状や、認知症が進行する様子が見られた。」と述べた。

介護職の小宮は、「施設長から町の情報を聞いた。この時、利用者で状況が分かる人も出てきて不安になる人もいた。

3日目くらいから24時間交代勤務になり、少し安心できた。利用者対応を第一優先と考えて家族のことはできるだけ考えないようにしていた。その後、職員に車1台を（貸し）出してくれることになり、交代で家族を捜しに行った。この時行くか迷ったが、他の職員に行ったほうがいいと言われた。家族全員が無事だった。

物資が来るようになったが、水はないので脱水症状になる利用者もいた。医務の方4人中3人がいたので避難者の手当てがだんだん落ち着き始めた。」と話してくれた。

理事長は、「物資が届き、らふたあヒルズや三陸園に分配した。震災から3日たつと様々な人と再会することができた。自ら内陸へ行き食糧などを調達した。下着など必要だと思う物は自分で買いに行き、各施設に配った。」と述べ

ている。

(3) 1週間後

生活相談員の手島は、「利用者の家族が施設に安否確認に来るようになったのは、震災から1週間程度経ったところからであった。郵政から無料のレタックスを多く頂戴し家族全員に入居者の様子と家族の安否について知らせしてほしいことを書き送った。どの程度手元に届いたかは不明であるが、数件便りがあった。

職員が施設から動けないので、職員の家族が施設に会いに来てくれた。連絡が取れなかった職員も2時間3時間かけて歩いて施設に来てくれた。

2週間後、入居者は元のユニット（内の自室）に戻り落ち着きが幾らか見え始めた。職員自身も被災者でもあることから30人ほどの職員が施設で1カ月間程度生活した。

1カ月半が過ぎてライフラインが復旧した。その頃から落ち着いて冷静に物事を考えられるようになった。」と述べている。

看護師の加藤は、「1週間経った頃から記録をとることを始められ、担当の係を決めた。」と述べている。

介護職の小宮によると「2週間後には発電機の数も増え、それまで1つのユニットに固まっていた利用者を、それぞれの（元の）ユニット（内の自室）に戻した。震災から今まで集団生活をしていて、普段はトイレに行ける人もオムツにしていたので、集団からユニットに戻ることへの不安があった。ほとんど寝たままの生活だったので立ち上りが悪い人を見て、どういう風にしたらまた元のような身体に戻れるかを考えた。夜勤の時2人一組で1人が懐中電灯で照らしながらオムツ交換をしていた。」と言う。

理事長は「3月15日に米1トンが届いた。どこから届けられたのか分からず、

自衛隊に問い合わせたら違うと言われ1週間保存した。その後もどこのものか判明しなかったため、各避難所へ分けた。

また親戚に花屋がいて、花を沢山送ってきた。亡くなった方の棺に供えることができた。」と言う。

この間、県・県社協・高齢協などの組織が会議を開き、被災状況の把握や職員派遣などを協議するようになる。3月22日には「県社協・沿岸ブロック・大植対策会議」が開かれ、三陸園・らふたあヒルズ・堤保育園から職員が参加し、被災状況の説明、ボランティアの受け入れなどについて説明がなされた。

(4) 1カ月後

栄養士の星野は、「4月1日には電気が使えるようになり、ミキサー食を作れるようになった。4月11日には一日に3食を提供できるようになり、安定して通常の食事を提供できるようになった。利用者の体重測定などをしたが、不思議と健康面では変わりがなかった。」と述べている。

看護師の加藤は、「祖父母を含め、家族7人でアパートに暮らすことに決まった。そこから職場に通うようになった。

利用者のADL（日常生活動作）が低下し、精神的な問題や認知症が進行した人が多かった。利用者からは不安や動悸の訴えをよくきいた。」と言う。

介護職の小宮は、「1カ月後には水などが使えるようになった。お風呂が1週間に1回入れるようになった。それまではタオルで体を拭いたりして、なるべく皮膚の清潔をはかった。

利用者に落ち着きが見えてきた。しかし、まだ状況を理解していない人もいれば、災害の状況を信じていない人もいた。利用者を外へ出してあげたいが、津波の現状も分からないし、家族もどくなったかは教えたくないので外出できなかった。」と言う。

妻の叔母が入居者だった秋山は、「入居者（義理の叔母）は現在98歳になるが、車いすも使用せず元気である。以前はゆーらっぷのショートステイを継続利用していた。2010年12月28日にらふたぁヒルズから、ユニットの部屋が空いたとの連絡を受けた。冬場であったこともあり入居を決め、利用中だったショートステイから直接個室に移った。

入居後も病院受診の付き添いや面会に夫婦で月1～2回行っていた。もしショートステイ利用のままであったら、利用日でない日に当たっていたかもしれない。入居を決めていてよかったと思っている。

しかし妻は3月11日の津波で行方不明となり、家も流された。3月18日に遺体が流された家の中で発見された。吉祥寺で四十九日（の法要）をやることが決まり、らふたぁヒルズにいる入居者である妻の叔母に妻のことを報告しに行ったが、何と言っていいか分からなかった。

震災以降は妻が面会に来ないので、最初は叔母から『忙しいのかい？』と聞かれたが答えられなかった。叔母に『妻は寿命だったんだよ』と伝えたら、理解してくれた。妻の死を伝えられたことで、胸に詰まったものが少し和らいだ。」と述べている。

（5） 当手を振り返って

理事長は、「とにかく動き回らなくちゃという思いだった。必要なものは買いに行き配って回った。三陸園からの避難道を事前に作っておいたのは良かった。5月に入って3回の会議をして今後の復興について話し合った。復興は学者や専門家と実際に被災した人の意見を聞くことが大切で、年月はかかる。」と述べている。

相談員の手島は、乾電池や懐中電灯などの物品の不足をまずあげた。「施設がオール電化であるにも関わらず、停電時の対策がなかった。また薬が不足し

た。今は利用者の薬は常時2週間分処方してもらうよう嘱託医に頼んでいる。震災後は一般的な薬も常備しておくようにした。

職員が、連絡がなくても行動できるよう取り決めたルールをつくった。施設長や上司がいないときのマニュアルをつくり、訓練や打ち合わせをして全職員が覚えておくことが必要だと考えている。

震災の1週間後くらいから、県内の施設からボランティアがおむつ、清拭タオル、グローブ、職員用のお菓子などの物資を持って手伝いに来てくれた。職員の被災状況の結果、中堅・ベテランの職員が多く退職することとなり、4月1日からは県内、他県よりの派遣職員に協力をお願いし、それは現在も続いている。

職員への精神的なケアとして、震災の1カ月後、職員同士で当時を振り返り話し合う機会を設けた。家や家族に被害があった職員は、施設長と面談した。自分は自宅も、家族にも被害がなかったことで、家をなくした人の気持ちを理解したいが、すべては共有できない。大丈夫だったからこそ、一歩引いて後押しができると考えている。

当日勤務だった職員と、2週間後出勤した職員とでは、震災当時の経験の温度差を感じた。そのため、職員間のバランスをとることが難しい。この状況は今も続いているように思う。

地震発生時間帯は、早番・日勤・遅番が出勤していて最も職員数が多い時間帯だった。また、6ユニット（のうち5ユニット）のリーダー5人が出勤していたことが幸いした。施設長はいたが、消防団員としての役割もあり、現場では自分が全体に指示を出さねばならない立場にあった。その責任に耐え、冷静な判断をするには訓練が必要である。普段から連絡や指示を出す経験をしていたことが良かった。

施設全体をまわしていくのが大変だった。職員がいないと運営が成り立たない。職員を帰すか、帰さないか、呼ぶタイミングにも苦労した。被害がないが

出勤してこない職員に対して疑問を抱いたこともあった。一方、被害のあった職員を3日間拘束してしまったことが、どうだったのか今でも気がかりである。

今回のような災害時には知識と経験が豊富でないといけないと感じた。いづどんな場面で災害が来るかわからない。施設全体どの職員も最低限必要とする認識、スキルは身につけておくべきものであると思う。また本当に究極の状況の中では、自分の身を守ることが第一であるということを職員間で確認すべきだと思う。」と述べた。

看護師の加藤は、「地震の発生から数日間は精いっぱいやれたと思う。物資は自衛隊が来るまで足りた。その後足りないものを言えば持ってきてもらえる環境にあったのが良かった。当時の気持ちを言えた人、言えなかった人もみんなで集まって話し合えたことで、わだかまりがとれたと思う。家族の仕事への理解や、職場の仲間、家があることが仕事を続ける原動力になった。

チーフ看護師が退職し、4～5月は2人の看護師でまわしたため精神的に疲れたが、ボランティアが入ったことで助かった。家が残った人に職場で肩身が狭いということを知り、『それは違うよ』と言った。また、そんなことを言う人がいるんだと驚いた。

歯科ボランティアが来て、口腔ケアの大切さを知った。経管栄養から、経口摂取に転換する訓練を始めた利用者もあり、3人の利用者が経口摂取に切り替わった。ボランティアの姿を見て、ケアの仕方が変化した職員もいた。

今回はボランティアにはとても助けられた。もし違うところで同じように災害があったら派遣などで手伝いに行きたいと思っている。また、そのために勉強もしていきたい。」と述べた。

栄養士の星野は、「3月17日に厨房の調理ボランティアを要請できるという話を施設長からもらったが、調理員たちは自分たちで出来ると断った。断った

理由は分からないが、もしかしたらボランティアが来ることで助かる半面、教えることも多く気を使うと考えたのではないかと思った。そのため自分達で頑張った。

自衛隊からの物資が届く前に地域の炊き出しをやっているところから、何回かおにぎりなどの物資がきた。3月16日には給食を委託している事業者が出向いて物資を届けてくれた。物資がいっぱい来たのは助かったし、ここは恵まれていると思った。」と言う。

介護職の小宮は、「職員は食事、排泄など最低限の対応しかできなかったが、ボランティアが来ることで利用者の話し相手になったり、コミュニケーションをとることで職員、利用者の安心に繋がった。歌を歌って利用者の気を紛らわせた。

水が使えなかったので、トイレに尿とりパッドをしいて吸収させた。お尻ふきでお尻をふいていた。介助が必要な人はおむつにしてもらっていた。支援物資で助かったものとしては、拭くタイプの歯ブラシ、口の中の乾燥を防ぐためのジェル（口腔保湿ジェル）。口腔衛生は大事だと思った。災害用の備品だけでなく、紙オムツなど利用者が使うものも準備しておけばよかった。ラジオ、電池、毛布はもっと用意しておけばよかった。

震災当時は、利用者のプライバシーを考えられなかった。もっとプライバシーに配慮すればよかった。つい立だけでオムツ交換をしていたが、こういうときこそもっと考えればよかった。ユニットケアのために、他のユニットの利用者と顔なじみになれなかった。職員の出入りが激しかった。

災害時にも働いたのは、みんなが頑張っているから、自分も頑張らないといけないと思ったからである。当時は特別な指示が無くても動けた。もし自分が自宅にいて被災してもらふたあに来ていたと思う。また避難所にも高齢者がいたら、助けていたと思う。休みだった職員も来てくれた。」と述べた。

らふたあヒルズで活動していた医師は、4月11日から7月11日までらふたあヒルズの地域交流センターで臨時的な病院を開設し、堤福社会の高齢者や地域の人々の診療にあたった。現在は吉里吉里地区で開業している。

理事長は次のような想いを述べている。「地震や津波の防災に対するマニュアルが薄かった。災害が起きたときの防災無線の（放送の）在り方も検討する必要がある。もっと注意を促すやり方をすべきだった。安全な高台にも注意を呼びかけられるようにすべきであると思う。

らふたあヒルズはオール電化の施設であるが、オール電化も考えようだと今は思う。発電機は必需品で、各家庭にも発電機があったほうがよい。また家庭でも災害マニュアルを作った方がよい。

今では支援慣れしてしまった人がいる。貰うことに慣れてしまった人は、雇用促進というけれども働かない。報道ではいいところしか映していないが、いまとなって悪いところも出てきた。震災を風化させないように、地域や個人で反省していくことが必要である。」

おわりに

今後はこれらの生の声を中心として、地震・津波災害時にどのような対応が必要か、また事前に準備しておくことはどのようなことかなどについて検討していく予定である。その際には、今回の聞き取りだけでなく、東日本大震災についての各種の研究報告を参考にして、考えていきたい。

注

- (1) 岩手県社会福祉法人台帳 <http://www.pref.iwate.jp/houjinshidou/002386.html>

検索日2014年7月29日